

小説とポストヒューマニティ ——中上健次『千年の愉楽』をめぐる

渡邊英理

I 「(再) 開発文学」と『千年の愉楽』

小説とポストヒューマニティという視座から、中上健次の小説『千年の愉楽』を「思想文学」として読み解いてみたい¹⁾。戦後生まれではじめて芥川賞を受賞した中上健次において、ポストヒューマニズムをめぐる思想は、ある時期の文学的プロジェクトの核心部に位置していたように思える。ただし、多様な広がりをもつポストヒューマン思想のすべてがあるというわけではない。中上が、その思想にもっとも接近するのは、「人間」と人文学の自己言及的な批判的検討、その再発明においてだと言える。それは、すくなくとも一般的に「中期」と呼ばれるテキストにおいて、重要な核心部にあるものだったように思われる。

いわゆる中期とは、中上文学の特権的なトポスである路地を舞台に紡がれた小説群が書かれた時期を指している。知られるように、路地とは、中上が生まれ育った場所、和歌山県新宮市の被差別部落をモデルに作家が生み出した虚構の空間である。それは、虚構によって普遍化され、抽象化を被っているけれども、しかし、被差別という固有の歴史とも複雑な関係性において結びついている。したがって、路地をめぐる中上の小説は、被差別部落という人外の場所から紡がれた言葉であり、人間主義の埒外ともされた被差別者の位置から語るものとも言え、そこでは、人間による人間に対する支配が対象化され、近代以来の「人間」観念の問い直しが含まれる。さらには、そのような「人間」主体を中心化してきた人文学の問い直しも行われることだろう。また路地は、被差別を被る空間で、そうであるがゆえに開発を被る、被差別かつ被開発の時空である。中上は、路地を舞台とする小説『岬』で芥川賞を受賞し、また、その続編の、同じく『枯木灘』でふたつの大きな賞を受賞している²⁾。しかしながら、1970年代の後半から80年代にかけて、それはちょうど『岬』や『枯木灘』の成功で中上が職業作家として大きく飛躍をとげていく時期なのだが、現実の路地こと被差別部落は、同和対策事業によって再開発され、その姿を大きく変えていく。中上は、その時期に発表された小説群の一部で路地を明確に被差別部落と名指し、それぞれの方法で再開発を主題化していった。多様なエージェンシーが関わる(再)開発の重層的で輻輳的なプロセスは、まさに被差別部落が開発の対象となるように、もともとあった差別を顕在化させ、浮上させ、ときに活用するものだが、さらには新たな差別をつくりだす側面もある。再開発そのものが脱差別と再差別の両方を含み込む、差別の再編でもある。同時に、開発は、人為の自然に対する侵食、植民的な介入でもあり、そこでは人間中心主義、人間中心的な非人間への関わり、人間による人間ならざるものへの支配も視野にはいつてくるだろう。拙著『中上健次論』では、中上の路地小説を開発や再開発を表象する文学として捉え

ると同時に、それに抗する思索や哲学を提示する思想として読み解いた。

『千年の愉楽』もまた、こうした「(再)開発文学」としての路地小説が書かれた時期に連載された短篇連作集だが、ただし、そこには直接的な開発の表象はない。しかし、「(再)開発文学」が伴うポストヒューマン的な問題構成が、別のしかたで展開されている。

Ⅱ 「ポストヒューマン」・「ポスト」・「ヒューマン」

ここで、ポストヒューマンという術語を注釈しておきたい。まず、ポストヒューマンの「ポスト」について考えよう。竹村和子は、「ポストフェミニズム」という術語を用いるのに際し、ポストには、ふたつの意味があると注釈している³⁾。今日、「ポストフェミニズム」という場合、ある種のフェミニズムが用済みであると考えられながら、その一方で、別の種類のフェミニズム、「ネオリベラル(新自由主義)フェミニズム」や「企業フェミニズム」と別称されるものがポピュラリティを得るような状況を指して用いられている。現在ポピュラリティを得ている「フェミニズム」とは、その名が示すように現在の新自由主義に合致する限りにおいて認められる市場主義的で個人主義的なフェミニズムのことだ。

しかし、竹村和子は、「ポストフェミニズム」という術語を異なる文脈で用いており、それがふたつのポストに示されている。ふたつのポストのうち、ひとつ目は、「以後」「○○の後」の意味、もうひとつは、自己参照的に、自己批判的に検証を続けるという意味である。20世紀後半になり、フェミニズムが拡大拡散し、旧来のフェミニズムは大きく変化している状況があり、その意味では、旧来のフェミニズムのあり方は終わっているとも言える。これが、前者の意味での「終わり」、「以後」としての「ポスト」である。と同時に、ではそこで、いったい何が変わり、何が変わっていないのか、理論的な深化と先鋭化をふまえて、フェミニズム思想が生き延びるための問い直し、自己への問いかけを行う、自己参照と自己批判的検証の意味が、後者のポストである。竹村は、このようなふたつのポストの意味で「ポストフェミニズム」を唱えた。

ポストヒューマンの「ポスト」も、このふたつの意味を持っている。それは、「人間以後」を意味すると同時に、「人間」について自己参照的に自己批判的な検証を続ける構え、「仮設」的なプロセスだと言える。ここで自己検証されるのは、「ヒューマン」ということだが、では、そのヒューマン、人間とは、なにか。それは、西洋近代の理想的な形象に与えられた名称や観念だ。具体的には、西洋／男性／ヘテロセクシュアルなどを体現するとされる者たちのことである。近代社会は、このような「人間」を正しい基準、ひとつの規範として歴史をつくってきた。ポストヒューマンとは、こうした規範とされてきた近代的な「人間」を批判し脱中心化していく出来事だ。しかし、ロージ・ブライドッティは、そもそも女性には十全な「人間」であるという立場性すら与えられてこなかった歴史を踏まえて、ヒューマンからポストヒューマンへの単線的な移行、「人間以後」へのリニアな歴史の進展を批判している⁴⁾。つまり、「人間」なるものに終焉を告げることができるのは、これまで十全に「人間」であり続けることが許されてきた男性たちの特権なのではないか。そのような強い問いをブライドッティは投げかけている。

ブライドッティの訳者である門林岳史は、こうしたブライドッティの批判を踏まえ、「ポストヒューマンについて真剣に考えることは、同時にポストヒューマンに抗して考えることである」

と端的に表現している。そして、こう続ける。「ポストヒューマンになるとは、単に人間を捨て去ることではなく、むしろ、人間をめぐる既存の観念に異議を突きつけつつ、それでも人間であり続けるしかない運命を肯定することだ」⁵⁾。門林は、プライドッティの思想に、「人間」についての批判的な視座を構え、「人間についての否定的な捉え方から出発して、人間についての学、あるいはもはや人間とは呼べないかもしれない私たちについての学」を再構築しようという提案を見出している。それは、「人文学を鍛え直して、新たなあり方を構想していく」⁶⁾という企て、ポスト人文学、ポストヒューマニティーズの企てだと言える。

Ⅲ 「ポストモダン」と「ポストヒューマン」

こうした点から見たとき、『千年の愉楽』の試みが浮き彫りになるように思われる。しかしながら、『千年の愉楽』は、「ポストヒューマン」ではなくて、むしろ、「ポストモダン」という文脈のなかに位置づけられ読まれてきた。

『地の果て 至上の時』は、古い権威を乗り越えるというモダンな原理が自らその根拠を抹消するという意味においてポストモダンだと言えるとするれば、そのことは同じ資格において『千年の愉楽』についても言えるのであって、それはある種の批評家が言うようにプレモダンな文字以前・歴史以前の世界への回帰であるよりも、近代の物語＝歴史が不可能になった後ではもはや疑似神話的な定型的物語の反復しかないという意味でポストモダンあるいはポストヒストリカルな世界なのです⁷⁾。

近代の歴史＝物語が不可能になった後ではもはや疑似神話的な定型的な物語の反復しかない。浅田彰は、そのような意味でのポストモダンあるいはポストヒストリカルな世界として、『千年の愉楽』を捉えている。『千年の愉楽』は六篇の短篇からなる連作集である。六篇は、いずれも路地を舞台とし、「高貴で穢れた血」を持つ路地で最古の一族「中本の一統」の若い男性たち、路地のアニたちを主人公とし、路地の産婆オリウノオバを語り手としている。各篇に登場する六人のアニたち——半蔵、三好、文彦、オリエントの康、新一郎、達男——はいずれも短命で、みな若すぎる悲劇的な死を遂げる。六篇はいずれも最後で、美しさと醜さを併せ持った路地で最古の中本の一統の若者たちの非業の死が語られ閉じられている。このように六篇は、若者たちの非業の死という物語を反復し、反復される物語において、六人は、構造として交換可能な位置を占めている。こうした物語構造に対して、浅田は、ポストモダン、すなわち「近代の物語の終わり」、「歴史の終わり」、ポストヒストリカルな世界における定型的物語の反復と評したのだ。

ここでは詳しくは立ち入ることを控えるが、この浅田の読みは、『千年の愉楽』をプレモダンなものとして読もうとする批評、近代に汚染されていない無垢な前近代の形象において読もうとする傾向に対して批判的に介入する批評であった。

しかしながら、先のプライドッティの批判を踏まえるなら、「ポストモダン」、すなわち「近代」に終わりを告げることができるのもまた、「人間」であることを許されてきた者たちの特権では

ないか。そのように問うこともできるだろう。したがって、門林の言葉を借りれば、「ポストモダンについて真剣に考えることは、同時にポストモダンに抗して考えること」である。とりわけ、『千年の愉楽』という、十全な「人間」であるという立ち位置すら与えられてこなかった被差別の者たちをめぐって書かれた小説が企てるのは、単に「歴史の終わり」「ポストヒストリカルな世界」を描くことでは、おそらくない。むしろ、その言葉が、より切実に求めるのは、ポストヒューマンとしてのポストモダン、すなわち、人間をはじめとする「近代をめぐる既存の観念に異議を突きつけ、もはや人間とは呼べないかもしれない私たちについての学」を再構築することではないだろうか。言い換えれば、ポスト人文学の再発明、ポストヒューマニティーズの再考の企てがそこには見られる。こうしたポストヒューマンとしてのポストモダンに再文脈化することで、『千年の愉楽』を紐解くことができるように思われる。

IV 国民 - 市民という仮構、「ポスト」の構え

『千年の愉楽』の語り手であるオリウノオバは、「賤民解放令」の記憶を度々想起し、その記憶を繰り返し語っている。

四民平等だと、上も下もなく皆一緒だと政令が出されけしからんと思った百姓らに竹槍で刺され家に火をつけられる事があった。

備後の方では山に逃げ込んだ者らが竹槍を持った百姓らに猿を獲るように追い立てられ突き刺されて十人ほどが死んだ⁸⁾

一八七一（明治四）年、明治政府は近世社会で最下層におかれた賤民の身分・職業ともに平民と平等とする布告、いわゆる「解放令」あるいは「賤民廃止令」を出した。「解放令」は、国民化・市民化という近代国家のプロジェクトの一環に位置したわけだが、結局のところ、それは差別の再編、差別の暴力を内包した平等化／平準化に過ぎず、解放令以後も旧賤民身分の「新平民」への差別は続く。たとえば、新政反対一揆には、廃藩置県、徴兵令、学制、地租改正、太陽暦の使用などのさまざまな新政策とともに、「解放令」に対する強い反発も含まれていた。したがって、新政反対の一揆勢が暴力を向けたのは支配層だけにとどまらず、「解放令」への反対から、被差別部落の家々に放火をし住民を殺傷することにも及んだ。歴史学者・藤野裕子が強調するように、「権力に対する民衆の暴力と、被差別者に向けた民衆暴力」は時に渾然一体になり単純に切り分けることはできず、「抑圧された苦しい現状から一挙に解放されたいという強い願望と、差別する対象を徹底的に排除し痛めつけたいという欲望」は、「民衆のなかに矛盾せず同居する」こともあったのだ⁹⁾。

オリウノオバが語るのは、この新政反対一揆で被差別部落に対してふるわれた暴力の記憶である。この逸話には、路地ごと被差別部落の人々を否定的な他者として排除する国民 - 市民という主体の暴力性が見事なまでに示されている。国民 - 市民という主体は、被差別民とともに女性、子供、病者、障害者、植民地や非規範的・少数的な価値をもつ人々を構成的外部とし、その外部を暴力の宛先ともする。同時に、ここには、路地ごと被差別部落の人々が、人間主体の

否定性としての動物——まったき人間の像を映す他者としての動物——の役割を担わされてきたこと、さらには、動物を他者として差異化することで立ち上げられた人間という主体の暴力性も示されている。『千年の愉楽』は、この差別の暴力を内包した国民-市民という「人間」主体に疑問符をつけ、^{ヒューマニズム}人間主義という仮構に問いを投げかける。このとき、小説の言葉は、人間による人間に対する差別と同時に、人間による人間ならざるものへの差別、その両方を手放すことなく、両者を同時に提示している。小説の言葉が開くのは、人間社会で差別される者が、同時に、非人間に対する差別者としての人間の側にもたつという地平である。このようにして小説は、「人間」を外在的に批判するのではなく、内在的に、自己参照的に批判する視座、すなわち、「人間」に対して自己批判的な検証を続ける「ポスト」の構え、「ポストヒューマニズムに抗してポストヒューマニズムを考える」視座を切り開くのだ。

さらに重要なのは、ここで批判に付されているのは、国民-市民という個人の主体であると同時に、国民や市民の集団性であるということだ。新政反対の一揆において、「平民」である国民-市民が集団となって、「新平民」である被差別部落民に襲いかかる、集団的な暴力を行使したように、ここで問われるのは、国民-市民という個人主体であると同時にその集団でもある。小説が問題化するの、個人と集団としての「国民-市民」モデルの「人間」主体だと言える。

V 共訳不可能な「生」、「集団」と「個」の再発明

では、『千年の愉楽』において、個人と集団は、どのように表象されているのだろうか。この路地の個と集団を考えるうえで示唆的なのが、シルヴィア・フェデリーチの『キャリバンと魔女』の議論である。『キャリバンと魔女』の翻訳者・小田原琳は、こう述べている。

身体が機械のようにコントロール可能なさまざまな機能の集合体とみなされてゆくにしたがって、資本主義の要請する規律を受け入れない身体は法的・制度的に排除されてゆく。一方でそれは、飲酒や娯楽にうつつをぬかす怠惰な身体——ものぐさで呑みだくれの怪物キャリバン——であり、他方では生殖につながらない性を謳歌する放縦な身体——男性を性的に翻弄する魔女——である¹⁰⁾。

キャリバンとはシェークスピアの戯曲「テンペスト」のなかに登場する島の怪物である。魔女の息子であるキャリバンは、被植民者の形象としても読み解かれる。フェデリーチは、同書のなかで、資本主義の本源的蓄積が、植民地と、女性の労働の価値の切り下げ、つまり国際分業と性別分業に由来していることを指摘している。単純化して言えば、資本主義社会において、プロレタリアートだけでなく、植民地と女性の搾取によって本源的蓄積がなされたということだ。キャリバンと魔女とは、その労働の価値を切り下げられた階級としての被植民者と女性であると言える。六篇における路地のアニたちは、酒を飲み博打をうち、放埒な性を謳歌し、自由な性愛に親しむ者だ。また、千年も万年も生きたオリウノオバは、事実上生殖を閉ざされた身体にあり、自らがとりあげた孫以上に年齢が離れたアニとも性的に交わっている。怠惰で呑みだくれの路地のアニたちは、フェデリーチが言うところのキャリバンであり、また、非生

殖的な性を体現するオリウノオバは、フェデリーチの言う魔女だと言える。それは、平準化された規範的な「労働力」に対して、規範から外れた「労働力」と換言できる。「キャリバンと魔女」とは、フォーティズムの労働に顕著な平準化された労働力、国力を支える国民化や市民化された労働力から逸脱する、劣等の不適切な身体、規格外の「労働力」だと言える。

先に見た「解放令」は、「国民」「市民」という「人間」をつくる近代国家のプロジェクトに位置づくものだが、『千年の愉楽』を路地の「キャリバンと魔女」の物語として読む時、「解放令」は経済的観点、あるいは「労働力化」という観点で再文脈化される。「解放令」によって、被差別民は、身分から解放されると同時に、旧来、部落特有の産業として得ていた特権的な職能を失うことになる。その結果、被差別部落の人々は、身分から解放された「自由な労働者」として、自らの労働力を切り売りすることになるのだが、しかし、近代以降も温存された部落差別によって、部落の人々の社会的上昇の扉はしばしば閉ざされてしまう。部落の人々は、社会的に排除されながら、同時に炭鉱労働など地下の労働、闇の労働で近代の光を支えていく。近代から追われて、同時に近代を支えた闇労働は、近代がつくりだした人間主義の埒外にある、個人という観念が失効する人外の場、人間ならざるものの場所だ。しかしながら、『千年の愉楽』は、「上」から、あるいは「外部」から人外におかれた被差別の場をまなざし、その「生」や経験を語る感性や言語を断固として拒否している。

たとえば、オバは、半蔵の子の竹信が、「昭和の天皇が崩御した同じ日」に、その半蔵の子の竹信の子の光輝がそのさらに未来の「昭和の次の年号の五年目」に死ぬと語るが、これは、小説執筆当時において未来にあたる予言的な語りである。元号を不適切に用いて語るオバの言葉は、支配秩序の時間性を「奪領」し攪乱している。

『千年の愉楽』が攪乱するのは、単に時間だけではない。時間性をはじめ地上の光の世界のあらゆる法則性を拒否する「逆さまの国」、それが『千年の愉楽』が開く世界だ。

確かに世間の親らのようにオリウノオバには人の物を盗んではいけない、人を殺めてもいけない、殺傷してもいけない、という道徳はあたうる限りない。何をやってもよい、そこにおまえが在るだけでよいいつも思ったし、礼如さんと暮らし続けて仏につかえる道は何もかもをそうだったと肯い得心する事だと思っていたので、物を食わないためかやせこけてなお注射針を体に射して、血管から逆流して注射器にまじる血を押し返すように射つ三好を、親にもらった体に針など射してはいけないとも言わないし、血管は血の他に異物など入れるものではないとも言わない¹¹⁾。(『千年の愉楽』「六道の辻」)

ここで、オリウノオバは、「道徳」など世間一般のものさしではかることはできない、共約不可能な「生」をあらわしている。「何をやってもよい、そこにおまえが在るだけでよい」とは、地上の尺度の無効性を表すものだろう。地上の尺度、既存の言語に代弁させてしまった瞬間、その質は失われてしまう。オバの語り、その言語は、この地上の光の国の言葉に翻訳不可能な経験を語ろうとすると同時に、その翻訳不可能性そのものを語っていると言える。ここに含意されるのは、「一般等価物」に換言／還元されない経験、すなわち、地上の言語である近代的な言語、「近代小説」の機構に適合しない「生」である。『千年の愉楽』には、大天狗など人間な

らざるもの、幻想の産物までもが人間たちと同じ資格をもって跋扈し、また、オバが千年も万年も生きたり、死んだオバが生き返ったり、地上の規則や法則にはそぐわない出来事が表象される。それらもまた「一般等価物」としての近代的言語、「近代小説」の機構に適合しない経験だ。近代小説の機構からこぼれ落ちる経験、その翻訳不可能性をこそ語る。この点において、小説は、西洋近代の人間／人文主義に対して、根本的な問いを投げかけている。

また、この時、小説には集団と個の「発明」の契機が兆している。「一般等価物」に換言／還元できない共認不可能な点で、『千年の愉楽』のアニたちの「生」は、いずれもかけがえのない単独性をもつものだ。と同時に、その「生」や存在は儚いものであるために、それ単独では可視化することができない。それらは、集団化されることではじめて可視化される。すなわち、反復され複数化されるアニたちは、その闇の「生」の単独での可視化の困難を可視化している。断片化された「生」が連ねられ、言語化されることで虚構化され、複数のなり普遍化されうる。しかしながら、それらの「生」は、「一般等価物」に掬い／救いとられながら、同時に、それに換言／還元されえず、零れ落ちてしまうという点で個別的で単独的である。地上の規則が失効した地点に現れる不揃いな地下の闇の群れ、その個と集団は、フォーディズム的な「部品」や「機械」としての労働力とも、国民・市民という個人や集団とも異なり、地上の規格化された個と集団の片鱗も欠片もない。『千年の愉楽』の反復的な物語はこうした個と集団の弁証法的契機であり、「個」的でありかつ「集団」的、不揃いかつ連続性をもつ「人間」の再発明に関与する。近代的な個人や自己完結した人間主体とも、集団的「労働力」や臣民化された国民集団とも異なる、相互依存的で多孔的、不揃いな個と集団である。それは、脱国家・脱資本的、脱人間／人文主義的な「個」と「集団」であり、今日の新自由主義が規範とする市場に適合的な自立した個人としての主体をも批判的に対象化するものだ。

VI 連なり境を越えゆく世界

『千年の愉楽』において、この「個」的であり「集団」的な「生」はしかし、人間たちに限るものではない。人間と人間ならざるものが連なりその境を越えゆく世界が、この小説の言葉のうちには顕れている。この「集団」と「個」の群れは、人間による人間に対する支配に抗すると同時に、人間による非人間への支配を批判的に対象化する。人間中心主義的な自然環境への関わりとは異なる関係性を希求する。

礼如さんは過去帳に月日を入れ名前を書き、あとから誰が見ても得心するように詳しく死んだ理由を書き入れる。それをオリウノオバは字が読めないので、ヒデの生れたのは十二月一日、死んだのは五月の末の日とそらんじる。来年の五月の末の日にも再来年の五月の末の日にも朝の御勤めを済まし茶を飲んで礼如さんに、今日は東の方のヒデの命日、トモジノオジがキクに産せた子のサゴの命日と、うっかりしたところのある礼如さんが忘れないようにそらんじた事を繰り返す¹²⁾。 (『千年の愉楽』「半蔵の鳥」)

語り手のオリウノオバは文字を読むことはできないが、親よりも先にとりあげた路地の子

すべてについて、誰と誰を親とし、いつ生まれ、いつ死んだのかを正確に誦じることができる。このオバと夫である礼如さんの間には、メディアと記憶の問題なども看取できるのだが、ここで注目したいのは、言説の差異である。その差異は、南方熊楠の「縁」を論じる石井美保や藤原辰史らが述べるところの因果と縁起の違いとして敷衍できる¹³⁾。「死んだ理由」を過去帳に記す礼如さんが象るのは、因果の物語だ。因果とは因果応報の因果、南方熊楠によれば「因はそれなくては果がおこらず。また因果なればそれに伴って果も異なるもの」¹⁴⁾、つまり、不可逆的な一直線の時間軸上で出来事を原因と結果の枠組みで捉える言説である。それは、路地で「凶事」が起り、それが続けば、「これは何が悪いのか」と問われるように、原因があって結果がある、一定の「法則」に基づいて一定の結果を得られるニュートン力学的な考え方であり、リアリズムの文法であり物語の権能だと言える。それに対して縁起は、熊楠の言うところでは「縁は一因果の継続中に他因果をこの身に継続しおる。縁に至りては一瞬に無数にあう」¹⁵⁾。縁起とは、縁起絵巻を例にして藤原辰史が述べるように、無数に絡まりあう「縁がどのように存在し得たのかをめぐる歴史」であり、その「歴史をめぐる厚み、膨らみとしての時間」である¹⁶⁾。「縁」は、ゆかりという意味であると同時に、へりやふちなど周縁という意味もあわせ持つが、衣服の縁と縁が触れあうように所縁をもち、物質のようにこの世を漂う人間は、偶発的な出会いと別れ、生存と死とを繰り返している¹⁷⁾。「縁」による離合集散は、人間にかぎるものではない。人間と人間ならざる者を含む多様な要素が切れながらつながることで構成される偶有的で潜勢力に満ちた世界。それが、縁起だ。

この人間を生きものとして自然の連鎖におく縁起の世界において、「私」もまた脱人間化され、受動的で偶有的な生命として、その生類たちの一部となって現れる。この小説が「発明」する「集団」かつ「個」とは、この「生類世界」の群れに棲まうものだ。「生命は水たまりにわいてくるボウフラのようになんの大仰な手続きもなく甘い香りを放つ白い夏芙蓉の一夜の夢のような路地の中に次々とわき出し」、その「虫のようにわく生命そのものが有難いものだ」とオリウノオバは言う¹⁸⁾。オバが語るのは、こうした文字通りの意味で「有難い」、存在することが難しい偶有性に左右される生きものとしての受動的な生命が「縁」を切ったりつなげたりする縁起の世界である。タイトルの『千年の愉楽』とは、この奇遇な「縁」の快味を指すものだろう。そこには、路地こと被差別部落の人々を四本足の獣を意味する渾名で名指すことで、高ヒエラルヒーとしての「われわれ」という人間主体を確定する暴力装置としての日本語の「伝統」、すなわち日本近代文学、その後継である「戦後文学」へと連なる人文学への批判もふくまれている。

「千年」とは、人間主義よりも長く連ねられてきた生命の縁起の時間である。もうひとつの人文学は、人間も非人間も同じ生き物として、ただひとつの偶有的な生命を生きるこの縁起的関わりから構想される。『千年の愉楽』は、その名の通り、より長い生命の縁起的な連なりで、人間主義／人文学を異化しているのだ。

(わたなべ・えり, Eri Watanabe, 大阪大学大学院人文学研究科)

[付記] 本研究は、JSPS 科研費 21K00263 のサポートを受けている。

注

- 1) 『千年の愉楽』は、「半蔵の鳥」「六道の辻」「天狗の松」「天人五衰」「ラブラタ綺譚」「カンナカムイの翼」の六つの短篇からなる連作集。各短篇の初出は、以下の通り「半蔵の鳥」(千年の愉楽一『文藝』1980年7月号)、「六道の辻」(千年の愉楽二、同、80年9月号)、「天狗の松」(千年の愉楽三、同、80年11月号)、「天人五衰」(千年の愉楽四、同、81年2月号)、「ラブラタ綺譚」(千年の愉楽五、同、82年1月号)、「カンナカムイの翼」(千年の愉楽六、同、82年4月号、この回には、第一部完結と記されている)。単行本は82年8月、河出書房新社刊。『中上健次全集第五巻』(集英社、1995)、『中上健次集七』(インスクリプト、2012)に収録。本稿の『千年の愉楽』の引用は、すべて本書による。
 なお、本稿の内容は、拙著『中上健次論』(インスクリプト、2022年)の第八章「生命の縁起、^{ポストヒューマニズム}脱人間／人文主義」の内容を、小説とポストヒューマニティという観点から新たに論じ直したものである。本稿の一部が同書と重なっていることをお断りしておく。
- 2) 「岬」は、初出『文學界』1975年10月号に掲載、単行本は76年に文藝春秋より刊行され、第74回・昭和50年度下半期芥川賞を受賞した。『枯木灘』は、『文藝』に1976年10月号から77年3月号まで連載され、単行本は77年5月に河出書房新社より刊行された。1977年10月に第31回毎日出版文化賞、1978年に第28回芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。
- 3) 竹村和子編『知の攻略思想読本10ポストフェミニズム』作品社、2003年、3～4頁。
- 4) ロージ・ブライドツティ『ポストヒューマン 新しい人文学に向けて』フィルム・アート社、2019年、門林岳史監訳。
- 5) 門林岳史「ポストヒューマンの後に誰が来るのか」竹崎一真・山本敦久編『ポストヒューマン・スタディーズへの招待』堀之内出版、2022年、170頁。
- 6) 門林岳史、同書、175頁。
- 7) 浅田彰「中上健次を再導入する」『批評空間』第12号、福武書店、1994年、12頁。
- 8) 『千年の愉楽』『ラブラタ奇譚』『中上健次集七』インスクリプト、2012年、124頁。
- 9) 藤野裕子『民衆暴力——一揆・暴動／虐殺の日本近代』中公新書、2020年、v頁、208頁。
- 10) 小田原琳「訳者改題」『キャリバンと魔女——資本主義に抵抗する女性身体』小田原琳・後藤あゆみ訳、以文社、2017年、387頁。
- 11) 『千年の愉楽』『六道の辻』前掲書、36～37頁。
- 12) 『千年の愉楽』『半蔵の鳥』前掲書、12頁。
- 13) 因果と縁起については、篠原雅武編著『現代思想の転換 2017——知のエッジをめぐる五つの対話』「対抗するテクノロジーの発明」(人文書院、2017年)における篠原および藤原辰史の発言、および石井美保『めぐりながれるものの人類学』(青土社、2019年)、「科学の詩学にむけて」(山室信一編『人文学宣言』ナカニシヤ書店、二〇一九年)、Casper Bruun Jensen, Miho Ishii, Philip Swift, “Attuning to the webs of en — Ontography, Japanese spirit worlds and the ‘tact’ of Minakata Kumagusu”, *HAU: Journal of Ethnographic theory* 6 (2): pp. 149–172などを主に参照している。
- 14) 『南方熊楠全集七巻 書簡 I』平凡社、1971年、391～392頁。
- 15) 同書、同頁。
- 16) 篠原雅武『現代思想の転換 2017 知のエッジをめぐる五つの対話』「3 対抗するテクノロジーの発明」人文書院、2017年、132頁。
- 17) 篠原、同書、126、131～132頁。
- 18) 『千年の愉楽』『六道の辻』前掲書、45頁。

